

動物倫理における理論と実践の関わり

オーガナイザー 浅野幸治(豊田工業大学)
提題者 生田武志(野宿者ネットワーク)
伊勢田哲治(京都大学)
井上太一(翻訳家・執筆家)

動物倫理は実践的な研究分野である。例えば、シンガーの『動物の解放』(1975年)は、最初から、動物実験と工場畜産という実際の問題を取りあげ、肉食主義の実践を主張した。この本の付録では肉食主義の料理法まで案内されている。カヴァリエリらは、大型類人猿プロジェクトを立ち上げて『大型類人猿の権利宣言』(1993年)を出し、大型類人猿を現実に解放するべく運動している。フランシオンはトガース大学で1990年から1999年まで動物権利法センターを運営して、動物のために数々の裁判に携わり、学生を教育してきた。このように、動物倫理の研究はたんに理論的な研究に留まらない。少なくとも研究者自身の生き方に関わってくる。おそらくは社会のあり方にも関わってくる。とはいえ、理論が実践と関わっていく仕方は1通りではない。さまざまな関わり方がありうるだろう。ただし、なんでもあり、というわけではない。どのような関わり方がよいのかが、いつでも問われる。いつでも、そうした模索の中にある。今回のワークショップも、そうした模索の試みである。そのため、会員の伊勢田哲治さんだけではなく、大学に属さないで研究し、それぞれの仕方で実践に携わっておられる2人の方にも提題をお願いした。1人は釜ヶ崎の雇労働者・野宿者支援活動に関わっておられる生田武志さんで、『「野宿者襲撃」論』(人文書院、2005年)、『貧困を考えよう』(岩波ジュニア新書、2009年)、『おっちゃん、なんで外で寝なあかんの?—こども夜回りと「ホームレス」の人たち』(あかね書房、2012年)、『釜ヶ崎から 貧困と野宿の日本』(ちくま文庫、2016年)、『いのちへの礼儀—国家・資本・家族の変容と動物たち』(ちくま書房、2019年)などを執筆されている。もう1人は井上太一さんで、井上さんはこれまでナイバート『動物・人間・暴虐史』(新評論、2016年)、スラッシャー『動物実験の闇』(合同出版、2017年)、フランシオン『動物の権利入門』(緑風出版、2018年)、ホーソーン『ビーガンという生き方』(緑風出版、2019年)その他多くの訳業を通して動物倫理の普及に尽力してこられた。最近も『動物倫理の最前線—批判的動物研究とは何か』(人文書院、2022年)という非常に力のこもった著書を出されている。また今回のワークショップでは、2人の特定質問者を立てる。1人は、動物擁護団体であるPEACE(Put an End to Animal Cruelty and Exploitation)代表の東さちこさんである。もう1人は、フェミニズム研究の佐藤静さんである。それぞれの視点から興味深い意見を聞かせてもらえると期待する。

以下、3人の提題者の提題要旨である。

第1提題 「動物問題の授業の試み」 生田武志

学校の授業などでペットの問題については取り上げられることが時にあるが、畜産、動物園、動物実験などの問題が取り上げられることはまずない。特に、家庭、学校で食される肉や卵、牛乳がどのように作られているかは、こどもたちにとって非常に重要な問題だが、それについて全く知らされていない。それは、「工業畜産」の問題がほとんど知らされていないことを意味する。

ぼくは、主に10代の少年グループによる「野宿者襲撃」を解決するため、2001年から学校などで「貧困と野宿を考える授業」を

続けてきた。「差別」解消のために、学校教育が非常に大きな意味があるからだが、「種差別」であり深刻な「動物虐待」である「工業畜産」問題の解決のためにも、同じような試みが必要ではないかと思う。

今、「学校で教えない授業」を企画している。そこでは、「ジェンダーとセクシャル・マイノリティ」「貧困」「外国人」「不登校」「動物」という問題を、企画者が相互に学び、議論しながら公開授業を行おうとしている。これらの社会問題は複合しており、相互の検証と批判が不可欠だからだ。

こうしたことから、「動物倫理における研究と実践の関わり」をどう進めていくかについて述べたい。

第2提題 「英米系動物倫理学における研究と実践」 伊勢田哲治

動物倫理は倫理学の理論的な観点からの議論が社会運動に影響を与えた数少ない例の一つである。シンガーやレーガンの動物解放論の議論はいわゆる動物の権利運動の直接のインスピレーションとなり、動物倫理の理論家たち自身も動物実験や工場畜産をはじめとした現実の問題について発言してきた。しかし、動物倫理の理論的研究と実践の距離が近ければいいのかといえれば必ずしもそういうわけではないだろう。たとえば、理論的な研究をする際に、特定の結論への事前のコミットメントが強すぎるなら、その結論に向けた強引な議論を行ってしまうということもあるかもしれないし、対立する立場のそれぞれを理解してフェアに分析を行うといった上でも、実践と少し距離があることが望ましいかもしれない。この提題では英米系の動物倫理の研究と実践の距離がこれまでどのようであったのか、そしてそれは今後どうあるのが望ましいのかを展望することとしたい。

第3提題 「動物倫理学研究の発展とその日本における課題」 井上太一

動物倫理学はその発足当初から動物擁護運動と深くリンクしながら発展した。とりわけその最新潮流である批判的動物研究は、実践性を重視する姿勢から、理論のための理論づくりを戒め、理論は現実の抑圧構造をなくすために存在するという点を明確にしている(拙著『動物倫理の最前線』を参照)。しかしながら、日本では動物倫理学が長らく日陰の学問であり続けたのに加え、アカデミズムとアクティビズムの乖離が生じているなど、研究上の課題も多い。本提題では動物倫理学のこれまでの歩みを振り返り、日本でその議論を深めていくためにどのような研究環境の改善が求められているかを検討したい。